
私の還る場所

ライスマンブルー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の還る場所

【Nコード】

N7626I

【作者名】

ライスマンブルー

【あらすじ】

気が付くと、何故か見知らぬ場所に居た少女。そこから織り成す、少女のストーリーとは？

プロローグ（前書き）

ども、ライスマンブルーです。幼稚な文章で、かなり見にくいとは思いますが、一所懸命にこのお話を描いていくので、何卒、よろしく願います。

それでは、どうぞ。“私の還る場所”の世界へ

プロローグ

そこは、小さな草原だった。森の中にある、ちょっとした開けた場所、といった感じだろうか。そこに、私は居た。

今はお昼くらいなのか、こんな場所にも太陽の光が射し込んでいる。幹に頭をあずけているせいか、そんなに眩しくはない。足はちよっと、暑いけど…。

ふと、一つの疑問が沸いてきた。なぜ、私はこんな所に居るのだろうか。私は、こんな場所で眠ってしまった覚えはないし、ましてや、森の中に入った記憶もない。

そこに、一つ。影が出来た。それは、私に近づく

「こんな場所に人がいるなんて、珍しい。あんまりのんびりしていたら、食べられちゃいますよ。」

っと、言った。影が喋るわけないから、本体を見上げると、緑色の上着とスカート、白色のシャツを着ていて、胸元には蝶々結びをしたリボン、頭には黒色のカチューシャをした、銀髪の少女が、凛とした表情で立っていた。そして、その少女にまわりついている、霊魂みたいなもの見える。霊魂には影がないみたいだけれど。

「私の顔に、何か付いてますか？」

黙って、顔を見ていたからだろうか、怪訝そうに少女が聞いてきた。

「あっ、いえ。」

「そうですか。先程申しましたが、のんびりしていると、食べられちゃいますよ。」

淡々と、あくまで淡々と、少女は言葉を紡ぐ。それは、機械的であり、それこそ、何回も練習をしてきた、スピーチを思わせる喋りだった。これが、普段の語り口調だったら失礼な話だが。

そこで、私は思いつく。一番最初に疑問に思ったことを、この少女に質問してはどうか。っと。

しかし、私の行動云々はエスパーかストーカーでもない限り、分
かりはしないだろう。だから、少々質問内容を変えることにする。
何故、私はここに居るのか。を、ここはどこか。にするだけなの
だけれど。場所さえ判明すれば、自力で何とかなるかもしれない。
早速、私は少女に質問してみた。

「移動する前に、一つ教えてほしいのだけれど、ここは、どこ？」

「あ、えっと。その…。幻想郷、です。」

「…幻想、郷？」

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？楽しんでいただけたでしょうか？

気が付くと、幻想郷に居た少女。これから、どんな風に物語は描かれていくのでしょうか。

まだまだ、続いていきます。次回“a c t 1”お楽しみに！

a c t 1 **(前書き)**

かなり遅い更新になりました。大変申し訳ありません。

act 1

もう、誰もそこには居なかった。さっきまで話してた女の子が幻だったのではないかと思うほどに、あっさりと消えてしまった。白昼夢……。だったのだろうか？

そう言えば、気になることを言っていた。のんびりしてたら食べられちゃうとか何とか。よく分からないけれど、肉食系の動物でもいるのだろう。ここに居ても何にも得になることはないし、何より人に会いたい。とりあえず、起き上がる。

ふと、右側に違和感を感じた。起きあがったときに、感覚がなかったような気がするのだ。腕が途中から無いような……。冷や汗が流れる。心なしか、呼吸まで乱れてきた。まさか、もう？さっきの少女が言っていたのは、こういうことだったのだ。「あんまりのんびりしていると、食べられちゃいますよ。」

さっきの言葉が脳内で流れる。ここで死んで終わり？そんなの嫌だ。嫌に決まってる。立とう。ここから逃げるんだ。

そう思った時には既に走り出していた。木々の合間を縫うように走る。後ろからは荒々しい呼吸音。何故か足音が聴こえない。おかしい。何故、足音が聴こえないの？木から木へ跳び移っているのなら、葉が擦れる音くらい聴こえるはず。鳥なら、可能か？でも、少しは音がするはず。だいたい、音もなく右腕を引きちぎるのは……。

そういえば、痛みがない。よく見れば、血も出ていない。しかし、呼吸音はする。訳が分からない。考えれば考えるほどにパニックになっっていく。

「……あうっ！」

木の根に躓き、転んでしまう。呼吸音が急激に近くなる。思わず振り返ると、指が見えた。咄嗟に避けたけど、少し遅かったみたいだ。指は、私の右目に深く深く突っ込まれていた。堪らず、叫んでしまう。

次の瞬間には、首を絞められていた。：苦しい。このまま、食べられて終わりなのかな？いや、まだ、まだ何かあるはずだ。こいつに勝てる何かが。左手を使い、手当たり次第に動かす。

何かに触れた。多分、木の枝かそこらだろう。それでも、私にとっては希望の光だ。それを手に取り、思いきり相手に目掛けて振る。どこに当たったかは分からないが、相手は悲鳴をあげて私から離れた。一気に立ち上がり、相手と距離を取る。右目が物凄く痛い、今はそんなことを気にしている場合ではない。それに、右目が失われたせいで、視野が明らかに狭くなっている。こんな状態で逃げたとしても、すぐに転んで捕まり、食べられてしまう。それなら、こいつをこの場で倒してからこの森を抜けた方が安全なことは間違いない。

相手も復活し、雄叫びをあげてこっちに突っ込んでくる。ギリギリのところまで右側にかわし、胴を打つ。相手が怯んだ隙を逃さず、顎を目掛けて一閃する。

バゴっと、鈍い音が辺りに響く。相手はピクリとも動かなくなり、気絶しているようだった。その間に蔓で腕をグルグル巻きにし、しっかりと結んでおいた。

安心したところで、さっさとこの場を後にしよう。また襲われでもしたら、次こそ死んでしまう。それに、早く右目を止血しないといけないし。私は、枝を杖代わりにして歩き出す。

act 2

どれくらい歩いたのだろうか？既に日は傾き、太陽の代わりに月が顔を覗かせている。

歩くのも限界だった。倒れるように、その場に寝転ぶ。土がひんやりしていて気持ちいい。もう、このまま眠ってしまおうか。

そう思った時だった。地面を透して川のせせらぎが聴こえたのは半ば、這いずるようになって進む。悲鳴をあげる体に鞭打って。

開けた場所にその川はあった。小さかったけれど、喉を潤すには十分だ。夢中で川に顔を突っ込み、喉を鳴らして飲む。若干鉄の味がしたけれどそれでも、私にとっては満足だった。

川から顔をあげ、仰向けに倒れる。と、疲れが頂点に達したのか、意識が遠くなっていく。気絶するように、私の意識は途切れた。

夢を見ていた。小さな女の子が泣いている夢だ。近くには女性がいる。何を言っているかは分からないけれど、困っているようだった。

ただ、一つ。お母さん。そう、聞こえた。

act 3

どれくらい眠っていたのだろうか？実際には数時間くらいだろうが、体が嫌に重く、節々が痛い。疲れてたとはいえ、こんな訳の分からぬ場所でよく眠れたもんだと、自分でも感心してしまう。

そういえば、逃げるときに右腕がなかったように思ったのだが、あれは気のせいだったのだろうか？逃げることに必死で、服の中に入ってたのを、直感的に“無い”っと、思ってしまったのではないか？

考えてても仕方ないので、確認をするため、着ていた服を脱ぐ。っと、二の腕から先が無かった。

「…う。うえ…。げほ、げほ！」

思わず、吐いてしまった。明らかな動揺が、私の心臓を破らんとするほどに、暴れまわっている。

深呼吸を何回か繰り返し、落ち着こうと努力する。なかなか収まらなかったが、次第に冷静さを取り戻してきた。

改めて、もう一度それを見る。外傷はなく、新しく出来たものではない。新しいものなら、私は今日を迎えることはなかっただろうし…。起き上がるときにも、違和感があったとはいえ、意外とすんなり起き上がったことを考えると、長い間、腕が無い生活を送っていたのだろう。

服を着直し、これからについて考えることにする。まずは、この森から出ることが先決だが、こんな調子で抜けられるだろうか？前みたいに、化け物に襲われでもしたら、確実に死んでしまうだろう。かと言って、水辺にいるのも危険だと思う。化け物だって、喉くらいは渴くだろうし。

とりあえず、その場から少し離れ、木の陰に隠れて様子を見ながら、体力の回復を待つことにする。

っと、人間と思わしき生物が、箒に跨がり、宙を飛んでやってき

た。

「まったく、霊夢の奴。私に水を汲んで来いなんて命令しやがって。少し、饅頭を盗み食いただけじゃないか。…ぶつぶつ。」

黒と白を基調としたワンピースみたいなを着て、黒いシルクハットみたいな帽子を被った、金髪の少女らしき人は、ぶつくさ文句を言いながらも、律儀に桶に水を汲んでいる。

これは、チャンスだ。あの人に、人の居る場所まで連れて行って貰おう。文句を言いながらも、やることはきちんとやっているんだし、きつと優しい人に違いない。

「あ、あの…」

勇気を振り絞って声をかけてみる。

しかし、気付かれなかったのだろう。その人は、箒に颯爽と跨がり、飛んでいってしまった。

ああ、みすみすチャンスを逃してしまった…。もうちょっと声を大きく出したら良かった。それにしても、お腹が空いてきた。饅頭って言ってたな…。きつと、甘くて、もふもふで美味しいんだろうなあ。

あはは。お腹の虫が鳴いてしまった。かといって、あまり遠くまで動く元気はない。とりあえず、近くに木の実などはないか、首だけを動かして探してみる。が、案の定というべきか、何にもなかった。

また、人が来ないかなあ。身勝手な考えかもしれないが、早く助けてもらいたい。さっきのチャンスを逃したのは、私なんだけど…。そんなことをぐるぐる考えている間に、いつの間にか日が暮れかかっていた。もう、こんなに時間が過ぎてしまったのか。

少し体を動かしてみるが、日が昇っていたときほどの痛みはない。体力も、多少は回復しているみたい。もう一日、ここで眠って、明日出発しよう。今度こそ、この森を抜けるんだ。

そうと決まれば、この喉の渴きを潤して、どこかに隠れて眠ろう。辺りを警戒しながら、水辺まで進む。早速、喉の渴きを潤した。

一日中何も口にしてなかったからか、いやに美味しく感じる。実際に美味しいのなら、失礼だけど…。

喉が潤ったのなら、今度は眠る場所を探さなければならない。できれば洞窟みたいな体が隠れる場所があれば良いのだけれど、都合良く近くにそんな場所はない。仕方なく、背の高い草がまとまって生えている場所で眠らせてもらうことにしよう。この中なら、木の陰よりかは、見つかる確率も低いと思うし。

横になってみると、草がなかなか良いクッションになって、意外と寝やすい。

さて、もう眠ろう。出発は明朝だ。

act 4

ピチョン。っと、頬に冷たい何かが当たる。寝惚け眼でそれを触ってみると、それは水のようなだった。

上体を起こし、辺りを見回してみる。草が朝露に濡れていて、キラキラしていて綺麗なのがまず、目に映った。しかし、太陽が昇る前なのだろうか。若干薄暗い印象を受ける。太陽が昇りきるのを待っても良いが、そんな時間はない。

立ち上がり、軽く背伸びをしてから歩き出す。が、足を止める。

そういえば、昨日の人はどこに向かったんだろう。たしか、霊夢とか言ってたけど…。もしかしたら、あの人が飛んでいった先には人がいるのかもしれない。

よし。とりあえず、あの人が飛んでいった方向に行こう。

再び私は歩き出す。最小限に、辺りを警戒するのも忘れない。

それにしても、どうして私はこんな場所にいるんだろう？ 幻想郷なんて聞いたこともないし、言われなければ分からなかった。だいたい、私はどこから此処に来たのだろうか。故郷と呼べる場所が私にもあったような気がするんだけど…。たしか…。……。駄目だ。思い出せない。自分の故郷も思い出せないなんて、どうしてしまったんだろう。

友達は？ えっと…。あ…。う…。そうだ、親は？ うっ……。

…私の、名前は？

「ひなた。」

そう。私の名前はひなた。なら、親は誰？ どんな人？

駄目。思い出せない。なんで、かな？ なんで、思い出せないの！？ 分からない…。分からないよ…。

気がつけば、私は歩くのを止めていた。その代わり、涙がポロポロと溢れでてくる。大事なものを無くしてしまったんだ。その思いが私にのし掛かる。私が、私に潰されそうだった。

一頻り泣いた後、顔を上げて頬をパチンと叩く。今は弱気になっちゃ駄目。大事なものを無くした。それは、とても悲しいことだけれど、私を知ってる人に出会えるかもしれない。その希望だけは、絶対に捨ててはいけない。ゴールなんてないけれど、ここから私のスタートなんだ。

もう一度、歩き出そう。私には、進むしかないんだから。

「…よい、どん。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7626i/>

私の還る場所

2010年10月8日11時43分発行